

2016年
3月1日
No. 95
隔月1回発行

特定非営利活動法人
レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク会報

ひきこもり



DO YOUR BEST.

イラスト 高津達弘

Index

- 2ページ LPF活動報告 手紙によるアウト・リーチ 他
- 3ページ ひきこもり学び直しセミナー
- 4～5ページ 月形のNPO実践～
人とのつながりの中で育まれる新しい働き方
- 6ページ ひきこもりにとって就労とは何か
- 7ページ SANGO の会 サル年新春の書初め
- 8ページ こちら事務局／編集後記



会報は札幌市さぽーとほっと
基金助成事業により作成され
ています。



(写真1)
ひきこもり「活躍の場は必ずある」
2016年1月8日付北海道新聞夕刊
写真は、高津達弘さんが描いたイラスト
の絵葉書にコメントを書いている田中敦
理理事長。

手紙(絵葉書)によるアウト・リーチ
実践研究 当事者からの反響

昨年4月から開始された「ひきこもりピ
ア・サポーター」による手紙を活用した効果的
なアウト・リーチ実践研究」では、ピア・サポ
ーターがひきこもりの者宅へ見返りを求めず片
思いで緩やかに毎週絵葉書を郵送してきた。
1月末までの総利用者数は56人。昨年11
月に実施した利用者アンケート調査結果(44
名回答)では、半数近くの利用者が「4月以
降も継続して利用したい」という回答を得
た。また、今回の事業は利用者の負担を無料

で行ってきたが「有料化してもよい」という
回答が25%を占め、双方が無理をしない地道
な支援に対して支持した当事者が多かった。
反面、絵葉書を通して本人と家族や周囲の
人たちとの話題の共有化ができていないケー
スも見られるなどの課題もみえてきた。

当団体に対しては「目に見えて効果がある
わけではないが、このような小さな支援を大
切にしてほしい」「生きていることへの実感
や意味、存在感について、アウト・リーチを
通して引き出してほしい」などの意見がみら
れた。

1月8日付北海道新聞夕刊にも取り上げら
れ(写真1)、その後も申し込みが増加し
た。手紙(絵葉書)によるアウト・リーチ実
践研究はいったん3月末で終了するが、希望
者には継続する。また、今回の事業内容が網
羅された報告書を発行。支援団体を中心に希
望者へ頒布する(8ページ参照)。

コンディショニング&
リラクゼーション全3回が終了

昨年10月から開催された中高年のひきこ
もり当事者の心身の健康増進を目的にストレ
ッチ体操を行なう「コンディショニング&リ
ラクスレックス」第三回が12月26日に開
催され、参加した5名は、恵庭POPFIT
のインストラクター作田文子氏と歓談し、と
きには瞑想にふけりながら普段使っていない
硬い身体をほぐすための指導を受けた。
作田氏は「副交感神経を高め、体幹を整え

理想の姿勢にして生活習慣を見直しながら毎
日ストレッチを行ってください」と述べ「ま
た機会があれば自助会へ顔を出したい」と参
加者との別れを惜しんでいた。

リラクゼーションを受けた感想について
聞いた事後評価アンケート調査結果(17名回
答)では、「非常に良かった」「良かった」
と回答した回答が9割を占めた。「身体をつ
くることが、精神の向上にもつながる」との
意見のほか「きついこと、厳しいことをしな
い」ことへのコメントも複数みられたことか
ら、緩やかな指導と個別的なニーズをおさえ
ながら、当事者と関わることの大切さもみえ
てきた。

当団体では今後も楽しみを持ちながら行
える地域めぐり山登りなど適度に身体を動
かすことを実践していきたい。

道産こもり179大学in旭川2015
当事者のパフォーマンスと対話

1月23日旭川市内で開催された「道産こも
り179大学in旭川2015」には約50名
の参加があり、ひきこもり経験者として登壇
した講師の植西あすみ先生、今 昭王先生の
講義を聴き、後半はグループに分かれたオー
ブン・ダイアログ(相互対話)を実施し参
加者同士の悩みを語り解決策を話し合った。
音楽をバネにひきこもりから回復した今先
生の講義では、得意のギターの弾き語りと歌
を披露、場内を湧かせていた。詳細は次号に
掲載。

ひきこもり 学び直しセミナー開催

昨年11月から3回にわたり開催した「ひきこもり学び直しセミナー」では、ひきこもり当事者に幅広く社会参加への興味を持ってもらうため、在宅ワークをはじめ、非排除を目指す新たな社会的事業所の取り組みや、農業を中心とした生産から加工まで手掛ける第六次産業の分野で活躍されている実践者を招き学習を重ねた。

「アフィリエイトという働き方」

日本アフィリエイト協議会理事の近藤 愛氏(写真1)は、自らITコンサルティング業を中心とした会社を立ち上げる他、旅行ライターなど多岐に渡り活動している。不登校が原因で高校中退後、大検で高卒を取得し大学へ進学。その後OLとして働きながらアフィリエイトに出会い、その魅力を社会に発信している。2014年にはNPO法人グローバル・シッパスこうべが主催する「ひきこもり大学in神戸」



(写真1)

「ひきこもり経済学」でアフィリエイトを紹介した。アフィリエイトとは、ブログなどに企業サイ

ト(オンラインショップ)のリンクを貼って、そこからブログなどの閲覧者がそのリンクを経由してサービスに申し込み報酬を得る広告手法。

近藤氏は「アフィリエイトは他の仕事と同じで、人の役立つものにするため手間と時間が必要だが、少額なら多くの人が稼ぐことができる」と述べ、かつて家族の顔を見ることさえできなかった時期にアフィリエイトを始め、感情を表に発するきっかけになったという。

ひきこもりの人たちに対して「こんな働き方もあることを知っているだけでも心の支えになる。ブログで商品を紹介する文章を書くことで気持ちが前向きになる」と自身の経験からアフィリエイトに対する思いを語った。

「わけない、きらない、共に働く」

NPO法人札幌障害者活動センターライフ専務理事の石澤利巳氏(写真2)は、炭鉱の長屋で子ども時代を過ごし、そこに根づく地域全体が支え合う相互扶助の理念が活動の原点だと振り返る。その後ベトナム戦争、学園紛争の時代、社会運動にのめりこむ中、反差別運動に活動の軸足を置く。

「人は差別されてはいけない」という強い信念を抱いた石澤氏は、33歳の時、共同出資で印刷会社「オフィスイマージュ」を起業。企業に馴染めない



(写真2)

人や失業者、障がい者を受け入れ、それらの人たちが共に働ける環境を整備。障がい者作業所を立ち上げ、国から補助金を得ることで生じる支援者と利用者を分けた政策に矛盾を抱きながらも、障がい持つ者と持たない者の間を対等にして能力主義はとらず、共に働き稼いだものを公平に分配する運営に努めた。

1999年、オフィスイマージュが二分化し、その一つが「NPO法人ライフ」として設立された。ライフでは、パソコン部門から自宅介護事業まで多様な職種を用意し、障がいのある人がやりたいことを事業化してきた。石澤氏は、現在に至るまで常に障がい者福祉の課題に直面しながら、かつて長屋暮らしで感じた地域での支え合い、多様な働き方が可能な社会的事業所づくりを目指し活動している。

「共に働きとも生きる」

農事組合法人共働学舎新得農場・代表の宮嶋 望氏(写真3)は、父親が長野県で創設した共働学舎の「自活自活」の理念を受け継ぎ、アメリカで2年間酪農実習を受けた経験を活かし、1978年6人のメンバーで新得共働

学舎を開始。現在は約75人のメンバーが酪農、有機野菜の生産、工芸などの仕事に従事し、米と魚以外はほとんど自給で賄いながら給料は少ないながらも豊かな生活を実現している。

メンバーの多くは、自閉症やひきこもりなど社会適応が難しい人たちのため、農場の主力製品であるチーズの生産過程では機械器具を使わず、手作業で作ることを心がけ、競争社会に適合できないメンバーの持つゆとりとした個々の特性に合わせた仕事が高い品質につながり、ナチュラルチーズの国際大会で入賞するまでになった。

かつてマザー・テレサから「あなたの力を必要としているのは身近にいる子どもたち。彼らの心の飢えを癒すことは、難民に食べ物を与えることより難しい」と言われ、新得農場を訪れる人たちが何を必要としているかを汲み取り答えられるようにした。メンバーに合わせた仕事づくりもその答えのひとつである。

宮嶋氏は「弱い立場にある声なき声に耳をかたむけ、

答えをだしていくことが『共に働きとも生きる』ことにつながる」と主張した。



(写真3)

月形のNPO実践 人とのつながりの中で育まれる新しい働き方

①NPO法人コミュニティネットワーク実践センター 月形事業所わくわく

地域に必要とされる存在へ

札幌から車で約1時間、月形の優しい街並みが続く。懐かしさの漂う商店もちらほら見られるその一角、青い大屋根と薄緑色の壁が町並みに溶け込んでいる建物が、NPO法人コミュニティネットワーク実践センター月形事業所「わくわく」。

同センターは、札幌市を拠点にして若者から高齢者までを対象に、就労から社会生活サポートなど様々な支援に取り組み、共に生きるためのコミュニティづくりを目指し2010年に発足したNPO法人。月形事業所は、地域で支え合える新たな拠点として開設。



(写真1) 月形事業所わくわく代表・穴澤義晴さん

月形事業所代表の穴澤義晴さん(写真1)は、かつて札幌市の若者活動センター長として、ニートやひきこもりで悩む人から相談を受けていた。継続的にサークル活動でセンターを利用していた月形在住者との出会いがきっかけで、すぐに一般就労に溶け込めない若者の受け皿として、月形で農業体験を始めようと試みた。

しかし細いつてを頼りに月形で活動を始めたが、簡単には受け入れてもらえず、地域に馴染む必要があると考えた穴澤さんは、町で困っている人たちの手助けをしながら、その地域に必要な存在になることから始めた。

「人とのつながりが新たな人をよび、次第に町に住む人たちとの交流が深まりゆく中、広い農園を所有する方の好意から、その農園での畑作業を札幌から出向いてきた若者たちに手伝ってもらい、農園所有者のお宅を間借りして自給自足で生活する体験を始め、近隣農家への手伝い、野菜の卸売り等活動が広がった。」

最初は若者活動センターの利用者が月1回程度の農業体験に参加していたが、NPO法人として本格的に始動した2010年からは、「樺月荘」を設立し、穴澤さんとともに現在5名の利用者が共同生活を続けながら生活費を稼ぎ、地域住民との交流の場づくりに力を注いでいる。

2015年から空知管内7市の生活困窮者自立相談支援事業の委託を受け、生活の課題に直面している人たちを対象に相談窓口「そらち生活サポートセンター」を開設。生活困窮者が社会復帰するために設置された「まどい」には、2名の利用者がシェアハウスとして生活している。

当事者が道をつくる

そらち生活サポートセンターの就労支援員・高橋史織さん(写真2)は、働くことに困難を感じている若者たちについて「最初はトレーニングとして農家の仕事を一人分の賃金で、三人の若者にやってもらった。次第に一人前の仕事ができるようになると、それぞれに賃金がもらえるようになった」と挫折感を抱く若者には緩やかな就労の段階とそれぞれのペースに合った働き方の必要性を訴えた。

また「彼らが地域に馴染み、地域の人たちから信頼されたお蔭で、後から参加する若者たちが参加しやすくなっ

た」と述べ、「私たちの活動が前に進んでいったのは、当事者である彼らが道を開拓してくれたおかげ」と5年間の歩みを振り返った。



(写真2) 穴澤さんと高橋さん(左)に事務所玄関前で見送っていただいた。

月形を第二のふるさとに

「都会の生活がしんどく、生きづらさを感じたとしても、月形に行けば何とかなる。月形が第二のふるさとのような最後の拠り所になればよい」。

ざっくばらんに話す穴澤さんは、月形での事業を地道に続け、訪れる人たちのニーズに合わせた懐の広い支援を目指す。若者支援全国協同連絡会の全国事務局長として多忙の毎日を送りながら、ホームグラウンドとして月形という第二のふるさとづくりに専心している。



(写真3) NPO 法人サトニクラス
代表・楠 順一さん

② NPO 法人サトニクラス

里で暮らし働き学ぶ

月形事業所「わくわーく」から約8キロ。緑の木々が生い茂る中腹に、かつて「わくわーく」で就労体験を積み、札幌から単身月形へ移住した柴田興さん(写真4)が働くNPO 法人サトニクラスがある。柴田さんは、ひきこもり経験者として月形で新たな道を開拓してくれた一人でもある。

NPO 法人サトニクラス代表で農家の楠 順一さん(写真3)は、東日本大震災後、東北の人たちが地域のつながりを手掛かりに再生した姿をみて、高齢化し新たな農家の担い手も少ない月形の現状を変えるため、2012年、地元の知的障がい者施設の古い建物を活用してサトニクラスを設立。里で暮らし働き学ぶことを重視して、農業と福祉で支え合う新しいコミュニティをつくることを目的に農産物の加

工販売から、障がい者や若者向けの就労支援まで幅広く活動している。

2012年の秋、「わくわーく」で就労体験をしていた柴田さんは、楠さんが営む農家で10日間の過酷な大根収穫作業を見事にやり切った。その仕事ぶりを高く評価した楠さんは、この年にNPO 法人化したサトニクラスで新たに漬物加工を開始するため、その担い手として柴田さんに声をかけた。

札幌出身の柴田さんは、かつて一年半ひきこもり、その後始めたアルバイト先に馴染めなかった経験をもつ。柴田さんにとって漬物加工事業は、新たな生き方を始めるチャンスでもあり月形に移住するきっかけとなった。

支援される者が支援する側へ

2013年4月から一年間、国の緊急雇用創出事業に採択され交付金を得て柴田さんを含め3名を正規雇用した。その後は自主財源で運営してきたが、2014年11月から就労継続支援A型事業所「サトニクラス酵母」を開設。現在は12名の障がいを持つ人の就労を受け入れ、地元産の野菜を使った漬物の製造販売を行っている。柴田さんはこの事業所で漬物加工の指導員として働いている。

「様々な特性をもつ人たちを束ねていく苦労も多いが、利用者さんがコツコツと仕事をこなしている姿をみて感

動を覚え、壁にぶつかった時、自分も頑張ろうと思う」と柴田さんは、利用者との関わりについて語った。

楠さんは、柴田さんのこれまでの歩みについて「最初のころは漬物づくりも試行錯誤の連続で大変苦労したと思うが、そこで身に着けた経験と技術が花開き、指導員の仕事に役立っている」と述べた。

農福連携を活かして

2015年からは町内の農業、福祉団体が連携して障がい者や生活困窮者に働く場を提供するため「つきがた農福交流推進協議会」が設立され、農林水産省の交付金を得て、3か年計画で農業の生産―加工―販売の現場での就労について調査研究と実践に取り組み。障がい者が可能な農作業の調査や、漬物や加工品の商品開発、地元産

の野菜、果物、切り花などを販売する直売所の開設など、農業と福祉が連携した第六次産業が展開されている。

月形町の人口は約3500人。炭鉱の閉山と関連企業の撤退により人口減少が進み現在に至る。この町に札幌など都市部に住む若者たちが、新しい雇用の担い手として訪れることは、月形町の持つ課題と若者就労の課題をマッチングさせて解決するモデルになっている。

今回の取材では、穴澤さんや楠さんとの出会いが縁となり都会で働いた柴田さんが都市部と地方の架け橋となり成長を遂げ、人とのつながりの中で育まれる新しい生き方や働き方をみるこ



(写真4) 一から学んだ漬物づくりに自信を持つ柴田さん。

★NPO 法人コミュニティワーク研究実践
センター月形事業所わくわーく
住所: 樺戸郡月形町市北5
連絡先: 0126-53-2850
E-MAIL: s.takahashi@cmtwork.net
(担当: 高橋さん)

★NPO 法人サトニクラス
住所: 樺戸郡月形町字知来乙 595
連絡先: 0126-53-2768

多様な働き方と持続可能な生き方を考える ひきこもりにとって就労とは何か

(写真1)



年齢の壁や履歴の空白などで不安に陥りやすい中高年ひきこもり当事者が、勇気を持って社会への一歩を踏み出すために何が必要なのかを考える講演会とオープン・ダイアログ（相互対話）を重視したフューチャーセッション「ひきこもりにとって就労とは何か」が1月17日、親、当事者、支援者など50名の参加者を迎え札幌市内の北農健保会館大会議室で開催された（写真1）。

前半は、12歳の時に不登校になり20歳までひきこもり生活を送り、その後社会復帰を果たし香川県で2箇所のひきこもり当事者や生きづらさを抱えた人たちの居場所を立ち上げ、現在は介護サービス会社に勤める傍ら「ひきこもり自助グループLamp」「生きづらサポートnode」を運営する宮武将大（しょうた）氏が「働く」というきっかけと、ひきこもりの“働き方”と題して基調講演した（写真2）。講演会前日に初めて北海道を訪れた宮武氏は「北海道では雪をかき分けるためゆっくり歩く。同時に時間もゆっくり過ぎていくのが新鮮だった」と感想を述べた後これまでの自身の辿ってきた歩みを語った。



(写真2)

宮武氏は小学校5年生の時に学力重視の担任に馴染めず不登校になるが「30歳までに社会へ出られればよい」と言ってくれた母親の度量の広さに救われ「家に居ることが普通のこととして家族が接してくれたことで安心して生活をおくることができた」と振り返った。

そのような安心できる生活を送る中、自分の将来についても考える余裕ができた頃、母親から言われた「親はいつまでも生きていない。せめてカップラーメンが買える生活はしてほしい」との言葉が、働いて賃金を得たいと思うきっかけになった。その後、長時間立つことが出来ないほどの体力を改善するため外出するように心がけ、16歳から4年かけて仕事に就くための基礎をつくり上げた結果、20歳でアルバイトに就く。「履歴の空白を気にしているのは自分だけ。意外に周囲は気にしていない」と、当事者特有に抱かれる不安感は、実際に行動することで払拭できることや仕事を続けた感想を好きなゲームにたとえ、レベルを上げながら成長する楽しさと仕事を通じて得られたことの良さを述べた。

宮武氏は自身の経験を活かしピア・サポーターとして訪問支援等を行っている。ひきこもりや生きづらさを抱える人たちの支援を続ける中、就労支援の課題に直面した宮武氏は「学校を卒業したら就職しなさい、ひきこもっているなら仕事をしなさい、という理由で当事者を就労に結びつけているが、何のために誰のために働くのかを考え、当事者が何をしたいのかを重視し当事者が望む仕事に就くためのサポートを細かいプロセスを経て実現してほしい」と主張。続けて「正職では8時間労働が基本だが、朝起きるのが苦手な場合12時出勤21時退社という働き方もあってよい。このように働く人のパフォーマンスが発揮できる環境を整備し、仕事への意欲が増すような働き方の構築をすべきだ」と訴えた。

今後の支援活動の展望について宮武氏は「ひきこもりを取り巻く課題は都市部だけではない。地方の課題を吸い上げて国や行政に発信しなければきめ細かい支援はできない」と述べ、全国に点在する様々な当事者経験者の団体と連絡を取り合いながら全国規模のネットワークづくりに力を注いでいる。



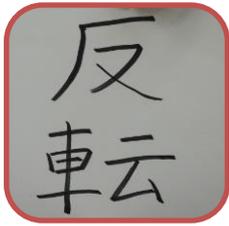
(写真3)

後半に行われたオープン・ダイアログ（対話）では、ひきこもり経験者がテーブルオーナーとなり「就労を踏み出すための土壌づくり」「多様な働き方を考える」「改めて問う家族の役割」「地方圏のひきこもりを考える」「当事者の生き抜く手立て」以上の5つのトピックについて参加者とともに熱心な対話を繰り広げた（写真3）。あるグループでは、社会福祉協議会、地域若者サポート・ステーション、ひきこもり地域支援センター、ピア・サポーターなど道内各地で活躍する熱心な支援者が集まった。会場の後方では親の会や支援団体がさまざまな情報を提供するなど、賑わいを感じさせる集まりとなり盛況の拍手のなか終了した。

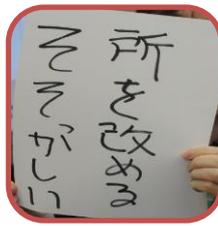
SANGOの会 新年の書初め



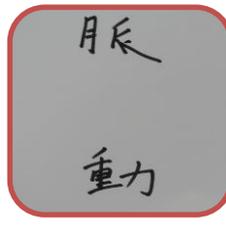
2016年1月6日に開催された新年初のSANGOの会では、参加者7名に新年の抱負を言葉に表してもらい、その言葉に込められた意味をそれぞれ語ってもらいました。



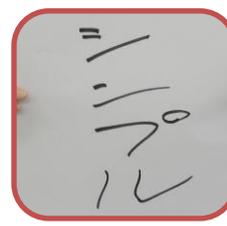
1



2

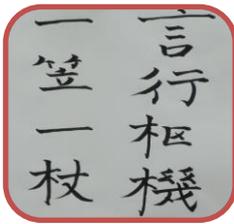


3

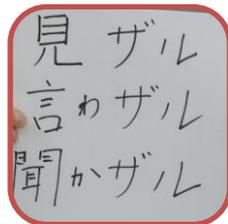


4

- 1.「反転」この数年間の就職活動での失敗を通して生き方を反転させ、2月から就職が決まった職場に希望を持ちながら前進していきたい。
- 2.「そそっかしい所を改める」初参加。これまでの「勘違い」など生活上の失敗が多かったので直していきたい。
- 3.「脈動」日マドキドキすることも多いが、問題に直面したときにはそれなりに対応できる自分もあり、あがいたりしながら生活する良さも実感。
- 4.「シンプル」昨年までは考えることを中心に生活してきたが、問題の本質を捉えシンプルに生活していきたい。



5



6



7



8

- 5.「言行枢機 一笠一杖」言葉や行動は最も重んずべきことだが、それに束縛されないよう身軽になるという教えを大切にしている。
- 6.「見ざる言わざる聞かざる」反対の意味として、周囲をよく観察して、人の意見に耳を傾け、自分の言いたいことを話せるようにしたい。
- 7.「飛」初参加。体力気力がないので新しいことに挑戦することは難しいが、飛ぶような勢いで進んでいきたい。海外にも飛んでいきたい希望もある。
- 8.「異」(田中 敦理事長) 昨年ひきこもりフューチャーセッション等に参加して、道外の当事者との関係も増えた。様々な見識や知識を持つ彼らの姿から、ひきこもりを経験した同士だからといって一律に同じような考えをもっていない。この異なる考えや思いを一つにまとめていきたい。

私たちの仲間になりませんか 会員募集をしています

レター・ポスト・フレンド相談ネットワークは若者の範疇に入らない成年・壮年期のひきこもりへの対応に軸足を置きながら、ひきこもり当事者が社会に出たとき、自信や希望を持ちながら歩めるような新しい働き方を、当事者自らが創造しています。

ぜひ多くの方々に、私たちの活動の趣旨を理解していただき、ひきこもり当事者が自信をもって生きていくことのできる、新しい社会のあり方をみなさんとともに追求していきたいと考えています。

会費

正会員	賛助会員	寄付金
入会金 1,000円	入会金 1,000円	一口 1,000円～
年会費 3,000円	年会費 2,000円	

◆「SANGOの会」例会のご案内

2016年4月は下記日程にて行ないます。初めての方も参加できます。概ね35歳前後のひきこもり当事者や経験者で、人との関係や会話に慣れたいと思っている方、またいろいろな情報を得たいと考えている方は、いらしてください。詳細は事務局までお問い合わせください。初めて参加される方で、少人数で会うことを希望される方は、事前に事務局までメール、電話でお問い合わせのうえ初心者の例会にお越しください。

《通常例会》

と き：4月6日(水) 午後1時15分から午後3時30分まで
会 場：札幌市社会福祉総合センター 3階 第三会議室

《初心者例会》

と き：4月25日(月) 午後1時15分から午後3時30分まで
会 場：札幌市社会福祉総合センター 4階 ボランティア活動室
場 所：札幌市中央区大通西19丁目
(地下鉄西18丁目駅下車徒歩5分)



◆一日福祉セミナー 開催予告

10月27日(木) 社会福祉法人札幌市社会福祉協議会札幌市ボランティア活動センター主催で一日福祉セミナーが開催されます。講師は田中 敦理事長。詳細は決まり次第お知らせします。



◆今年度事業の成果物が発行されます

「北海道中高年ひきこもり就労準備支援事業・理解啓発リーフレット」

(平成27年度公益財団法人北海道新聞社福祉振興基金助成金事業)
今年度実施した就労支援の一環として実施してきた「健康づくり」「学び直しセミナー」「中間的就労」の三本の柱からなる事業内容の総括が網羅されています(左写真)。A4版カラー・全8ページ

「ひきこもりピア・サポーターによる手紙を活用した効果的なアウト・リーチ実践研究 報告書」

(平成27年度公益財団法人日本社会福祉弘済会社会福祉助成事業)

1年間にわたり、ひきこもり当事者に毎週手紙(絵葉書)を送付してきた実践内容の報告と利用者44名に対して実施したアンケート集計の結果を掲載。A4版モノクロ・全22ページ

希望者には郵送料(500円)で受け付けます。また、道内の電子書籍出版社(電子書籍の本屋さんドゥーパブ)でも無料で閲覧できます。<http://dopub.jp/>

皆様からの投稿をお待ちしています

〒064-0824 札幌市中央区北4条西26丁目3-2

「NPO法人 レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク」事務局 通信編集部 宛

e-mail ; info@letter-post.com

☆ 編集後記 ☆

2月26日から29日まで福島市に行ってきました。福島市にも昨年ひきこもり当事者の自助会が発足しその代表者のご縁があり交流する機会を得ました。震災から5年が経過しましたが、今なお古里に帰還できない人たちがまだまだ多くいます。私たちに何ができるのか、改めて考えていきたいと思ひます。

(発行責任者 理事長 田中 敦)

無断複製はおやめください